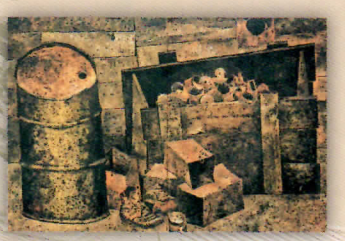
結局、どう云う作品が生れるかは、
どう云う生きかたをするかにかかっている。
どう生きるのか、の指針を描くことを通して模索したい。
どう生きるか、と、どう描くのかの
終りのない思考のいたちごっこが
私の生活の骨組なのだ。

神田日勝

「馬」
1957年 油彩·ベニヤ(73.0×105.0)

中学を卒業した日勝は、営農に勤しむ傍ら油彩画の制作に励みました。この作品は、同様の主題で平原社展に初出品·初入賞した「痩馬」に続いて発表され、最高賞である協会賞を受賞しました。ここに描かれた馬は日勝と生活をともにした農耕馬であると思われ、その姿を通して戦後開拓生活の一端を偲ぶことができます。これ以降日勝は生涯を通して馬を描きつづけました。



「ゴミ箱」
1961年 油彩·ベニヤ(121.0×184.0)

牧舎と思われる光景の中に、ドラム缶や空缶、粗末な木製のゴミ箱などがデフォルメ(変形)され描かれています。モチーフは、すべて使い古され、雨風に晒されたものばかりで、それを執拗に観察し描写しています。

「牛」
1964年 油彩·ベニヤ(144.0×144.0)

石床の上に敷かれた筵の上に、折り曲げられた足を鎖で縛られ腹を切り裂かれた牛が横たわる光景。永遠の眠りについた牛の穏やかな表情とは対照的に、切り裂かれた赤い腹部の鮮烈さに目が惹かれます。赤や青、白の色が部分的に取り入られ、これ以降日勝作品に色彩が用いられるようになります。

「飯場の風景」
1963年 油彩·ベニヤ(138.2×183.5)

飯場で働く男たちを描いた作品。手や足を大きく描くことで働く男たちの逞しさと、画面全体を支配する沈黙から過酷な労働に従事する者の束の間の休息が描かれています。日勝には飯場体験はありませんが、開拓農民としての共通する境遇がそこに活写されています。

「晴れた日の風景」
1968年
油彩·ベニヤ(182.5×183.5)

左官ゴテを改良して、「人と牛」の連作に代表されるように絵の具を厚塗りした作品を制作するようになります。豊かな色彩と激しい筆触は、画法の大きな転換のようにも見えます。モチーフは人と馬という従来のものですが、アンフォルメルの大きなうねりの中で、日勝も画壇の潮流に敏感に反応していたのかもしれません。

「馬(絶筆·未完)」
1970年 油彩·鉛筆·ベニヤ(183.3×204.0)

未完成作品としてアトリエに残されていた作品。むき出しのベニヤに半身だけが描かれた馬。後ろ足はかすかに鉛筆の輪郭があるだけです。しかし、さまざまな画風の変遷の後に描かれたこの作品は、画家自身が初期のモノクロームの世界に回帰し再出発をしようとしたようにも見えます。描き残された馬の背景などから画家がどのようにこの作品を仕上げようとしたのかを考えるとき空想が広がる作品です。

神田 日勝 *KANDA NISSHO 1937－1970*

昭和12年、東京·練馬生まれ。戦時疎開で十勝の鹿追町に移住し、開拓営農のかたわら油彩を制作、全道展会員となる。独立美術選抜展·第一回北海道秀作美術展など出品。昭和45年、32歳で急逝。没後、北海道立近代美術館に「室内風景」などが収蔵。
「神田日勝の世界」展、「日本のリアリズム」展を経て、戦後期新具象の作風に美術史的評価が高い。